

相談・研究部門では、東日本大震災における被災地支援として以下の取組を行っています。

● 「子どもたちに絵本で笑顔をプロジェクト」に参加

宮城県仙台市宮城野区を拠点とする、NPO法人地球の楽好（ちきゅうのがっこう）の上記プロジェクトに参加しています。港区地域こぞって子育て懇談会企画メンバー（近隣のママ&パパたち）らに呼びかけ、第一弾として4月13日に絵本507冊を送りました。地球の楽好さんは、仙台のママたちが27年前に立ち上げた子育て支援団体が、直接子どもたちへ支援することで母親や保護者の支援にもなると昨年12月に立ち上げたNPO法人です。同じママの立場から応援したいと、作業にも企画メンバー8名が参加しました（学生含む）。



たくさん集まった絵本を、対象年齢ごとに分け、各箱にインデックスを付けて送りました。



ママに連れられ参加したすみれちゃんも、メッセージを一所懸命書いてくれました。

● NPO法人地球の楽好「都内活動報告会」開催の応援（4月27日）

地球の楽好さんが、都内の支援者に向けた活動報告会を開催するにあたり、会場提供と記録作成（2ページ以降に掲載）を行いました。子育て支援を長く実践されるNPOとのご縁を大切に、今後も交流と応援を続けたいと考えています。



4月27日(水)当所で開催された報告会(昼の部)
◆報告会の内容は、2ページ以降に掲載しています。どうぞご覧ください。



メッセージを書きました。今後ともよろしくお願ひします！

…… NPO法人地球の楽好「都内活動報告会」……

2011年4月27日(水) 昼の部 11:30-13:30、夜の部 18:00-20:00

報告者：理事長 千葉透さん

副理事長 小柳明子さん

会場：明治学院大学社会学部付属研究所

●理事長千葉さんより、はじめのご挨拶

みなさんご支援ありがとうございます。今日は、お礼とお願いにきました。東北地方で起こっていることを伝えたいです。

●地球の楽好の活動とは？

地球の楽好は、子育て支援を行っている団体です。お母さんたちの市民活動として、講座に集まった7人のお母さんで始まりました。26年前は、今のような子育て支援はなかったので、自分たちがほしい情報は自分たちで集めて情報誌を発行したり、イベントを行って、続けてきました。活動している中で、「子どもたちに直接伝えたり、支援することも必要だね」ということで、地球の楽好というNPO法人を立ち上げました。ベースは主体的に子育てをするお母さんたちの支援で、子どもたちにも体験学習の場などを提供しています。今年で活動は27年目。設立当時、NPO法人制度はなかったので、アクティブ・マザーズ・コミュニティ有限会社を立ち上げました。会社としての5代目の代表が小柳です。

子育ての環境づくり・出版・子どもたち向けのイベント、そして、4年前からレストラン事業を始めました。お母さんたちの就労支援と食育です。イタリア語で、お母さんの意味の「ミアマードレ」というレストランの展開をしています。仙台市内に3店舗。お母さんと同じ気持ちで作っているというコンセプトです。働きながらの子育てを理想として、働く場所がなければ作ろうということで継続しています。

●千葉さんのおはなし1 「震災当日、夢メッセみやぎに津波―」

地球の楽好は、港地区という仙台市宮城野区にあります。現在、盛んに開発が進められているエリアで、ショッピングセンターや水族館を誘致しているエリアにあるコンベンションセンターの夢メッセみやぎにあります。震災当日は、食関係のイベントが催され、3000人くらいの来場があったそうです。瞬間としても2000人くらいいたでしょう。家族連れ、大学生、カップル等が来場していました。私は、イベント会場の裏にある会議棟で仕事をしていました。突然の大きな揺れで、レストランの職員に、「大丈夫か、火を消せ」と指示しましたが、2回目はもっと大きく、立っていることもしゃがむこともできませんでした。しゃがんだら飛ばされるので、近くにしがみついていた。周りのものが倒れてきました。3-5分と言われていますが、10分くらいと記憶しています。机の下に頭を隠すことも

できない、激しい揺れでした。震災のちょうど1週間前に年2-3回行っている、津波時の避難訓練がありました。イベントと会館側のスタッフで、訓練通り来場者を外へ出しました。地震後、夢メッセは、県の施設なので、県から直接津波警報の情報が入り、屋上まで避難誘導しました。けれど、携帯等で津波の到達予想時刻をみている人は多く、その時間は午後3時50分だったので、「まだ大丈夫」と半分くらいの人は車で出て行こうとしました。小さいお子さん連れの方や年配の方は、すぐに屋上へ避難していました。開発中の場であり、金曜日でにぎわい、通常でも渋滞する地域ですが、付近の3つの幹線道路すべてが大渋滞だったようです。私たちは屋上から見ていました。海がスーッと沈んだので、津波はまちがいなく来ると思いましたが、これまでは、かするくらいの津波しか経験なく、今回もそのくらいだろうと思いましたが、初め足首くらいでしたが、津波だと力が強いので、近くの港へ運びこまれていた新車が700-800台くらい流れ始めました。そのうち、こちらにも来て、私の車も流れたが仕方ないかと、、、。

そのあと目の前にあったのは、波の「白い壁」でした。真正面からそのまま押し寄せてきて、「これはまずい」と思い、スピーカーで「大きな津波が来ているから皆逃げろ、早く上がってこい」と騒ぎましたが、下にいると津波が見えないからか、車に乗ったままの人も、歩いたままの人も、渋滞のため海側に逃げている人もいました。イベントなので土地勘のない人も来ていたでしょう。津波は陸に来ると、それまでの徐々にではなく、一気に、われわれが上から見ているところで一瞬のうちに、たくさんの人をさらっていきました。

その後何回か津波が来ました。水が、全部そのままいろいろなものをもっていきました。車がせき止められたところから火が出たので、消火栓をもって放水準備し、放水を開始しましたが、瞬間にちょろっとなかなか出ませんでした。すぐ後ろの貿易関係のビルの方が安全ということで、裏口から上がり一晩そこで過ごしました。近隣の工場関係者も避難してきて、最終的に、翌朝の点呼では1000人以上でした。初めは吹雪でしたが、屋根もあったしよかったです。地球の楽好のスタッフもいました。お母さんスタッフは、電話もつながらず子どものことが心配というので、夜明けに帰ることにしました。そのビルには、小さい子もお年寄りも人工透析の方もいました。救急車を県の直接の電話で呼んでも来ません。夕方5時に呼んで、来たのは夜中の2時、救急車が出て行ったのは4時でした。夜明けの5時50分に屋上に戻って見たら、びっくりしました。瓦礫の山でびっくりしたのではなく、何もなくてびっくりしたのです。波打ち際がそばまであり、何もない状態でした。

●千葉さんのおはなし2 「震災翌日、自宅へ水の中4時間歩く」

スタッフと名簿を残し帰りました。陸地に入れば入るほど、瓦礫の山が多くなり、水かさは増えていきました。海岸側の方は水が引きましたが、内陸の方がまだ3メートルもありました。浅い所を選んで帰りましたが、それでも私の胸あたりまで水がありました。マンホールが、全部噴き出て道路の中に穴が開いていました。見ていると避難している人が、その穴にずぼっと落ちて上がってきません。まっすぐ垂直なので、そのまま入ってしまう

と、胸まで水がある所だとどうしようもなかったです。長いストックをつきながら、スタッフを後ろにして進みました。いろいろなものが流されていました。「助けて」「挟まれていまーす」という声も聞こえてきましたが、2メートルも3メートルも水があるので行けません。自衛隊の方に言っても、あっちにもこっちにも行けないのです。隣の多賀城市に陸上自衛隊があり、多賀城駐屯地、普通科連隊・教育連隊には一番若い方々が集まっていますが、そこも浸水し、最初の装甲車が出せないのです。初動体制は、朝の5時からでしたが足りなくて、「わかってます、わかってます」と言われました。途中ですれ違う警察官に、「あそこにいます」というと、「今福島や岩手に応援要請していますから、もう少し待ってください」と言われましたが、福島も岩手もそれどころではないので、応援には来られなかったのだと思います。宮城県は、福島県と岩手県と災害協定を結んでいますが、全部が被災地だったので、とにかく人手が足りなかったのです。

通常、私の家まで歩いて40分くらいで着きますが、瓦礫と水とトレーラーが折り重なっていました。通常では考えられない所まで津波がきているので、道路は瓦礫の山、トレーラーがあると上って運転席の中に入って助手席を超えて瓦礫の山を下って、ずーっと歩いて4時間か5時間くらいかかりました。

家族は何とか無事でしたが、電気も電話もつながらない。食料もない。地元のPTA会長をしているので小学校へすぐ行きましたが、食べ物はなく、環境は非常に悪かったです。

想定はもちろんしていて、ある程度の備蓄があるので3日間しのげば何とかなるということでした。が、今回はとにかく範囲が広く、道路も寸断され、電話も通じない、携帯電話も基地局が水でやられてバッテリーがなく電波が届かない状態が続きました。どこに誰がいるかも把握できない状況でした。

●小柳さんのおはなし1 「震災当日、家族と中学校へ避難、そして津波―」

私は、震災当日、通常なら港地区にいてバタバタ仕事をして家にいないのですが、2番目の子どもの卒業式で、娘のおかげで家にいました。娘に感謝しています。子ども3人と夫と、子どもの友だちと、皆がすぐ近くにいる状況でした。地震の時、マンションの7階にいましたが、耐震構造のマンションではないので、とんでもない揺れでした。下の娘が卒業式の片づけをしており、中学校が避難場所でもあるので、すぐに中学校に行きました。中学校の校庭まで行ったところで、千葉さんとメールでやり取りしました。そのころはまだメールはつながっていました。

夢メッセの方はちょっとですが海が見える場所なので、津波が起こるとは思っていました。津波の画像が送られて来た時、ちょうど校庭に逃げていました。先生たちが騒いでいるのが見えて、何を騒いでいるのだろうと思いました。車に戻り、千葉さんからの津波情報を見て、学校の先生たちも「津波だ、津波、あがれー」と騒いでいます。「何を？」と試してみたら、学校のすぐ目の前まで津波というか、水しぶきが、車と家とかと一緒にやって来ました。皆で校庭から上に上がって、その光景を呆然と見る状態でした。午前中は天

気がよく、「卒業式日和だね」と言っていたのに、雪がばんばん降ってきて、世界の終りというか、人がちっぽけに見える一瞬でした。こんなところまで津波が来るのは、本当に考えられないので、「これはただごとではないな」と思いました。自分は母親という視線でいうと、「子どもと離れたら終わりだ」という意識がわいてきました。そのあと「第二波、第三波がくる」というアナウンスがきて、先生たちは、「そこにいてください」と言いましたが、それも誰も安全を保証できないと思い、マンションの方が高台と思い、知っている子に「ともかく高い方へおいでよ」とできるだけ声を出して、「ここまで来ないって誰にもわからない」と右往左往しながら声をかけました。

第二波第三波がきて、私の父が住んでおり我が家の家財一式を置いていた多賀城大代地区は130世帯のうち、約110世帯の1階がすべて浸水しました。その数も持ち家の数なので、アパート数まで入れると、ほとんどが避難しなければいけない状況の津波でした。その頃までメールはつながっていました。火災が起きていることもぼつぼつと来ていました。どうしようと思って、とりあえずスタッフの安否を一と思いましたが、連絡が取れなくなりました。

その頃杉本さん（東京にいる地球の楽好の理事）から「東京もすごく揺れたけど、仙台は大丈夫？」というメールが来ました。子どもたちも、「杉本さんナイス！」と言っていました。まだ津波が来る前でしたが、津波が来て、「これはただ事ではない」と思いました。千葉さんから、「知らせてくれ」と何回か津波の被害情報が送られて来ました。私どもは車の中にいたので、テレビからの情報が入っていましたが、警察も消防も当然連絡しても繋がりませんでした。他の地区もすごく大変で、小学校自体が呑み込まれているとか、仙台市若林地区で200人から300人の遺体があるのではないかと、とか、千葉さんから聞く状況とで、「これはとんでもない。地域の人だけではどうにもならない」と思い、杉本さんにも連絡しました。

イベントの企画運営をやっていた関係で、東京にたくさんの知り合いがいるので、「とりあえず東京から連絡してください」と言いました。「夢メッセみやぎでも何百人もが避難して、火災が起きているようです」という連絡をしました。そうしているうちに、石油コンビナートが爆発していると、これは報道もされていたと思いますが、火災が起き始めたのです。

その日は避難所に行っても、一晩中、ひとつの体育館に千人くらいいるような状態だったので、車の中で一晩過ごしました。でも余震が続き、石油コンビナートが燃えているので寝られない、何かあったらすぐ逃げられるようにと車にすることにしました。

●小柳さんのおはなし2

「何かしないと精神がもたないー、そして、『絵本を集めたい』へ」

子育て支援の活動をずっとやってきて、スタッフが神戸のレインボーハウスさんの話も

聞き、情報誌に掲載したことがあります。大人が精神的に不安定になっている中で、「子どもはもっとひどいことになるかもしれない、もしかすると、この状態は神戸以上かもしれない」「死者が地元でも 30 名くらいという話も最初の報道であったが、そんなわけないでしょう」と皆の話を聞いて思いました。

同じ地域の中学生や高校生は、当日卒業式だったので商業施設に遊びに行っていました。その地域が水に浸かったので、皆帰りながら、千葉さんが見た光景と同じ現状を見て帰ってきました。高校生も、映像を絶対忘れないだろうと思います。親戚の子も見たことを、すごくハイテンションになって人にしゃべって解消しようとし、とりあえずしゃべらないとだめだみたい、楽しい話のようにしゃべるのです。しばらくして、同じ子ではないように、挨拶もしないですつといなくなったり一そういう状態を何日間も見ました。これは、私たち自体も、何かしないと精神がもたなくなると感じました。

それで、「なんか絵本だなー」というところに行きつきました。絵本の大切さ、絵本はすごい力をくれると考え、いつときでも忘れられる場所があったり、本来お母さんがお膝で読んでくれるのがいちばんいいと思いますが、「そういう時間を早く作れたらいいな、作れるようになるといいな」という希望やいろいろな想いから、「絵本を集めたい」と杉本さんにメールしました。「これはもう絵本しかないと思うから」が始まりでした。

●千葉さんのおはなし 3

「津波に襲われる夢、ハイテンション、どよんー避難所まわりへ」

私自身、1 週間眠れませんでした。寝ていると、津波に襲われている夢で目が覚め、余震ですぐびくっとなります。ハイテンションになって、「あーでこーですごかったんだよ」と言っている時もあれば、気がつくとき膝を抱えて、どよんとする時もありました。子どもたちはもつとです。甥たちも水にのまれて助かり、車で流されて何とか水の中から這い上がった親戚もいますが、同じ状態で、すごく明るく「あーどうしたのー」と話していると思うと、突然泣き始めます。

「なんとかしなくては」と考え、避難所をまわり、リサーチし始めました。最初は 3 日たっても食料が来ないので、1 日に乾パンを家族で 2 枚とか、食パンを一家族で 1 枚とかでした。

●小柳さんのおはなし 3 「平衡を保てば役立てる時が来る」

最初の 1 週間は、車で生活していました。初めてのことで、役場の人も、どうしたらよいかわからない状態で、とにかく環境がひどかったです。土足で体育館に入ると、その脇で寝ていらっしゃる方もいたり、トレイも土足。避難所で生活するのは難しいと思いました。そして、私たちが、とにかく平衡を保てれば、何か人の役に立てる時が来るし、できると思いました。とりあえず、車の中で過ごし、情報を得るためにテレビをつけていると、ずっと同じ津波の映像が流れていました。津波の音と映像と、寝ているのか起きて

いるのかわからない 1 週間の中で、なにかしなければと思ったので、炊き出しに行ったりしました。レストランにあった冷凍の食品を、食べられるようにして持って行きました。お稲荷さんが一人 1 個はいい方で、食パン 1 枚を 5 人で食べたり、でした。水は、1 週間くらいは 1 日にコップ 1/3 でした。コンビニももちろん開きませんでした。ガラスを割って食べ物とろうという人もいたので、コンビニも警戒態勢でした。並んでいても、何しに来たという感じで、今思うとお互いにしょうがなく、世界のほかの国に比べれば少ない方だったと思います。ガソリンもなく、スタンドの前で 4 時間 5 時間並んで待っても、でも開かなかったという日が何日も続きました。

●千葉さんと小柳さんのおはなし 「NPOの出番だ！」

おじいちゃんおばあちゃんは甘いものを食べたいというので、冷蔵庫におはぎ、3 月なので桜餅もありました。行政に話を通すと、「皆に均等に平等に配りましょう」になります。今後の課題ですが、本当に困るお年寄りにはいかないのです。友人が行政の対策本部にいたので相談したら、「内緒で持って行ったほうが早いよ、行政を通すと面倒くさい」と言われました。行政は行政として、しっかり指揮命令系統で行わないと統制が取れなくなるからです。こういうとき、「NPOは自由に動ける、NPOの出番なのだ！」と思い、直接ほしい人のいる所にもっていきました。

倒壊したお菓子屋に行って、どうせ売れないだろうからと言って分けてもらった 1000 人分くらいの甘い和菓子を持って、おじいちゃんおばあちゃんのいる避難所に行きました。

津波の被害を受けていない所は、普通に地震の被害を受けた地域ですが、一步沿岸に近くなると、全然世界が異なる状態でした。状況を話して、喜んでくれるからと話す「持っていってくれ」と言ってくれました。ガソリンもきびしかったです、明日のことを考えていると何もできないので、「まずは動こうよ」と動き始め、何日間かは自転車でとりに行って運びました。

毎日カップめんなどばかりだったので、そのうち野菜がほしいということになりました。避難所では、野菜は炊き出ししないと食べられないですが、自宅で避難している方もたくさんいたので、農家さんが収穫したけどガソリンもなく市場もあかないので出荷できない野菜を集めました。農家さんにちゃんとお支払いしたいので現金で集めて、そのままの価格の頒布会で、野菜や卵を、地元のNPOセンター前で、スーパーが開き始まる前まで行いました。

東京で買占めが始まった頃、被災した地域では店の中が崩壊しているので表にテーブルを置いて、一人何個まで、と売っていました。子どものおむつは言ってくれば、店舗内から持ってきますからという状態でした。朝 10 時に店が開くが、老人の方は買うために 6

時から並んだといいます。並んでも、ほしいものが買えるわけではなかったの、避難所よりも、自宅があるけれど蓄えた食料がない年配の方がいるところで、販売の形で3日間くらい行いました。そうしたら、市の方でも、市場をやりたいと始めました。

●千葉さんのおはなし4 「避難所での話～『てんでんこ』がわかった～」

行政が始めるなら、われわれは、「次に行こう」と絵本へ移り、避難所をまわってリサーチを行いました。

3日後自分の海沿いの集落の実家が心配で、自転車で行くと、全く土台すらない状態でした。叔父叔母の安否がわからないので避難所をまわると、地元なので幼馴染も先輩もいました。でも抱き合って、「よかった生きてて」という言葉がかけられないのです。「よかった生きてて」「いや女房がまだ、、、」とか、「子どもがまだ見つからない」という話ばかりで、「生きててよかった」と言えないのです。私が小さいころから知っているおばあさんに、「命あるだけよかったでしょう、生きてるだけで」と言ったら、「俺も流されればよかったー」「死んだのも大変だが生きるのも地獄だー」と言われました。津波の被害は、65歳以上がほとんどと言われていますが、そのひとつの理由として、逃げないのです。「避難所で迷惑かけるから俺はいいから、あんたたちで逃げな」というのです。うちのおばあさんは助かったのですが、それは「あんたに死なれたらあとで文句言われっから」と無理やり逃げてもらったといいます。そのおばあさんも、避難所で一昨日亡くなりました。ストレスもあったでしょう。

若い方では、弟の奥さんのお姉さんが亡くなりました。沿岸地域は、新しい住宅はなく、昔からの集落がほとんどで、隣近所の付き合いが深いものだから、「あそこのおばあさんは足が悪い」「あそこは寝たきりだ」「あそこは腰痛持ちだ」と、みんなが把握していて、そのお姉さんは、子どもには「まず逃げなさい」と言い、「裏のおばあさん足悪いはずだから行ってくるから」と言って、そのまま家の中で亡くなってしまいました。

ある所でも、「おじいさんとおばあさんがいるはずだから」と自分の家族を軽トラックに1回避難させて降ろした後、ひき返しおじいさんおばあさんを乗せたまま、、、

三陸沖津波もチリ津波も経験していた、もう亡くなった明治生まれのおばあさんが言っていました、沿岸部では「てんでんこだぞ」と言います。「てんでんこ」とは、「食べ物をはてんでんに分けなさい」とか、「これはてんでんにやるんだよ」とか、「それぞれだよ」ということ。その意味がわかりました。「年寄りを放っておいても、自分のうちが大事だから逃げなさい、誰かを助けに行くとそこで二人死んじゃうよ」という意味だったのです。「津波を見たら放っておけよ、てんでんこだから」とおばあさんは言っていたのですが、今回よくわかりました。

報道でもあるように、宮城県の大川小学校は全校児童108名の内、68名が亡くなりました。10名が行方不明なので8割、ほとんどの児童が亡くなりました。学校の先生が校庭に集まりなさいと言い、「津波だー」ということで、「どこへ逃げようか」と集団で川沿いを

歩いたといえます。その時に、高台に逃げていればよかったのですが、高台はがけ崩れの危険があったのです。逆に、別の学校では、「津波がくるぞー」といった瞬間、「みんな逃げろ」と先生がひとこと言い、それぞれ自分の判断で高い所へ逃げて、全員が助かった学校もありましたが一概には言えないのです。子どもたちの点呼をとって安全確認して、先生の指導で全員が逃げたところもあれば、ともかく逃げろという学校もあったのです。そのときでないといけないし、あとから検証しても、どちらが正しいか、われわれにもわかりません。

叔父も消防団員で、海沿いに行き水門を占めたところ大きい津波が来るというので、6人のうちの3人は平地に逃げ、3人は高台に逃げました。平地の方が水はいかず、高台に行った3人が遺体で見つかりました。必ずしも、災害にマニュアルはないのだと思います。

●小柳さんのおはなし4 「絵本5冊でも10冊でもすごく大きな力」

100人いたら100通りのストーリーがあります。15分10分の違いでとか、話としていっぱいありすぎるくらいあります。

TVに出た閑上（ゆりあげ）中学校は、一番高い3階建ての建物で、公民館も避難所になっていてそこが津波を受けました。避難所に指定されているから行ったら、想定外の津波がきて、流されて、、、、ということでした。閑上地域は、同級生や友人等がいる地域です。連絡がとりにくかったですが、とれたら自分たちは大丈夫だったが、旦那さんのご両親が、「俺たちはいいから、お前たち逃げろ」と言ってそのまま見つかりません。高台がなく、逃げるまでの距離がものすごく長い地域が、名取と仙台地域で、リアス式の三陸の方が高台があります。

避難所では、地元の河北新聞や朝日新聞など、3紙を読めましたが、津波被害のエリアを示した朝日新聞の地図が一番わかりやすかったです。通常本当に考えられない地域まで、津波が来ました。今皆から、「海沿いの家になっちゃった」というメールが来ます。海沿いではなかったのに、周りに家がないので、すごく見晴しのよい海沿いになってしまったというのです。周りの亡くなった人のことを考えると、もうここに住めないけれど、「やはりここにいる、なんとか復興というか何かしていかなければ、と思うと離れるに離れられない」というメールも来ます。

報道では、復興のイメージが強くなったかもしれませんが、閑上地区も仙台の地域も、やっとな瓦礫を撤去し始めて、行方不明の方を探し始めている地域もまだまだあります。自衛隊の方も、自分たちも被災しているという中何とか見つけようと、探そうとしています。

「まだまだだ」ということを伝えたい中で、「では、そこで私たちにできることは何か」と思った時に、伝えてたくさんの方に知ってもらいたいと考えました。津波が来ていない地域の仙台の方は、普通の生活をしています。普通に生活してくれていいのですが、でも、たとえば高校で1クラスの中に、2人被災している、家が流れた、親戚が亡くなっているという子がいるクラスがあっても、残念なことに子どもにとってはあまりピンと来ていませ

ん。その地域まで見に行くこともできません。画面だけでみていると、他の国の話？みたいなイメージのようです。

全国の方が、絵本のかたちで、この活動にこんなに賛同してくれていること、5冊でも10冊でも集まると、すごく大きな力になるということなど、みなさんがやってくれていることを、被災している東北の地域の中で普通に生活している人たちにも伝えて、「そこで私たちがやろうねー」と知る部分も必要だと思います。皆さんの力によって、私たちは、これから一步一步、心の部分も含めて、ゆっくりだと思います。テレビの報道ほどではないので、10年以上かかるのではないかと思います。アロマをやっている友人も、「3年間がんばります」と言っていました、「3年間で保証がある？10年やろうと思ってやらないと何もならない、3年どころじゃないよ、あちこち見て思うよ」と話したら、「あーそうですね、わかりました。10年と思って一緒にやります」と言ってくれましたが、まだまだそんな状況です。

●千葉さんのおはなし5「来て見てほしいし、伝えてほしい」

ライフラインも道路も復旧はしました。新幹線も昨日(2011年4月26日)から復旧しましたが、復興はまったくできていません。瓦礫を搬出するための主要幹線道路の簡易的な応急工事は終わりました。これからが、本格的な瓦礫の除去。大がかりな捜索が入ったと言っていますが、それらは人手での捜索であり、重機を使って瓦礫を取り除いての捜索作業は一昨日から始まりました。

閉上地区でヒアリングした時に、愛知の消防隊が寄ってきて、「あまりにもひどすぎて、なかなか見つけることができません」と深々と頭を下げられました。とにかく広い。阪神震災も大変な災害でしたし、集中してたくさんの方が亡くなりましたが、今回はとにかく広い。見渡す限り、どこにいるかわからない。埋まっているのであればいいのですが、津波が全部もっていっています。私の事務所の椅子なども、3-4キロ離れた街中の方まで流れていました。それほど津波の力が強かったのです。

話してもイメージは伝わらないと思うので、ぜひ時間のある方は、観光でけっこう、物見遊山でけっこうですから、来て見てほしいし、伝えてほしいです。よく「観光客来るな」と地元の間で言う人もいますが、私は逆だと思います。「小さい子にはショックだから見せないように」という言う人もいますが、私は「見てほしい」です。子どもたちに、「こういうことがあったんだよ」と話してほしいです。見た方が帰って、また伝えてほしい。悲劇はテレビでやっていますが、ドラマではなく実際にどうということが、同じ日本で起きていたのか、ぜひ自分の目で見て、臭いを嗅いでいただきたいです。

●小柳さんのおはなし5

「心のケアが必要、最終的には自分たちで乗り越える力を」

心のケアが必要だとすごく思うのは、私自身、たまたま子どもといっしょにいて被災し、

実際に津波の被害がひどかった所に絵本をお届けして見てくると、子どもと離れていることにすごく恐怖感を覚えるのです。子どもと離れていることにスイッチが入ると、おかしくなるくらいです。子どもにも、「多分お母さんがおかしいかもしれないけど、とにかく震災が起きる前と違うから、今学校出たよとか連絡を取り合ってください」と話しました。「今この辺歩いているんだな」とか、「今こうしているんだな」とか、わからないとものすごく恐怖で、多分一緒にいて被災したからだと思います。逆に離れて、学校で被災して、3・4日間帰れなかった方もたくさんいますが、皆といるときは怖くなったりとか、心が出かたが、これからいろいろだろうと思われま。

自分が経験しているだけに、絵本を届けながら、子どもと一緒に関わりながらケアしていこうと思っています。海沿いに行くとき、何日か行っても平気なのに、ある日突然すごく怖くて、海で雨が降ってきて、怖くて怖くて、「早く帰ろうよ」と心臓がドキドキしてくる時もあります。多分たくさんの子供が、そういう状態なのだろうと思います。

これは、継続的に何らかの形で続けないと、ここにいる私たちもだし、見えない子どもたちのこれからが本当にかわいそうです。普通に、「こういう大人になりたいね」なんて言えなくなってしまったらかわいそう。それには、何回も言いましたが、絵本の力が集められ、届けられたらと思います。うちの子どもたちも全部流された中から、「ぐりぐら」などを出して「お母さんーこれー」とか言います。泥まみれになった絵本をみながら、「なんか哀しいね」と。新しいものや届いた本をみて、子どもたちも手伝っていますが、「思い出をひとつひとつ、ただけて元気が出るよね」と話しています。

セーブザチルドレンという早くに立ち上がった、報道されている団体の遊びのひろばにスタッフが参加しています。一人が、実際に北上に行って避難所で炊き出ししたり、家を建ててあげたりしています。

やはり最終的に、自分たちの力で、お母さん自身が元気になって、子どもが自分の力で元気になって、乗り越えていく力を持たないと、多分 10 年 20 年先、誰の支援もなくなった時に、「さてどうしよう」ということになるのではないかと、思います。まず、できる部分からやっていけたらなと思います。